

耐震構造の祖

「佐野利器」

生誕130年記念展

白鷹町出身で日本を代表する構造建築家で耐震構造の第一人者である故「佐野利器（さのとしかた）」氏が今年、生誕130年を迎えました。

白鷹町では、この郷土が生んだ偉大な同氏の功績を讃え、後世に語り継ぐことを目的とし、新しいモノづくりの視点から産業センターオープンに併せて企画展を開催しています。郷土が輩出した偉人について、展示をぜひご覧ください。

- ▼期間 12月1日(水)～22日(水)
- ▼会場 町産業センター(パワーセンター白鷹)ロビー
- ▼見どころ 功績等のパネル展示のほか、生家(山口家)の協力による遺品展示

■問い合わせ 総務課企画調整係 (☎ 85 - 6123)



写真提供：山口三郎兵衛氏

佐野利器（さのとしかた 1880～1956年）

1880年（明治13年）4月11日、荒砥出来町の山口三郎兵衛の四男として生まれ「安兵衛」と命名される。石那田小学校（現在の荒砥小学校）を卒業後、米沢中学（現在の興譲館高校）に入学。米沢中学在籍時に実父が死亡したため、佐野家の養子となった。その際、名前を「利器」に改める。旧制第二高等学校を経て東大工科大学建築科に進学。建築学を辰野金吾に学んだ。卒業後、同校講師、助教授。この他、赤レンガ東京駅の構造設計を担当した。欧米諸国へ3年間留学し、1918年（大正7年）、教授に就任した。1915年（大正4年）「家屋耐震構造論」で工学博士号を取得。同論文は、日本の建築構造学の基礎を築いたものと評され、また建築構造の耐震理論構築としては当時世界初の試みである。その実力から明治神宮造営局参事・参与を務め、社殿や宝物殿の建設、外苑の整備に関与した。佐野氏は技術に立脚して国論を展開することを旨とし、そのための活動を開始する。工学で教育される工学理論の実践教育の場として「高等工学校」を提案した。これが総合大学化を進めていた日本大学の主旨と合致し、日本大学高等工学校が1920年（大正9年）に誕生、同時に校長に就任（1928年、日本大学工学部長）した。また、兼務で宮内省技師にも就任、関東大震災後には帝都復興院理事に就任し、関東大震災後の復興事業・土地区画整理事業を推進した。その後、東京市建築局長を兼任し、鉄筋コンクリート造の小学校建築に当たり、都市の不燃化に務めた。50歳で東大教授を辞任し、1929年（昭和4年）～1932年（昭和7年）清水組（現在の清水建設㈱）副社長を務め、建設会社組織の近代化を図った。清水組退社後は、従来から務めていた日本大学工学部長、東京工業大学教授の職に専念した。また、戦後は復興建設技術協会協会長なども務めた。

耐震構造学の研究を進め、また震災後の都市復興、都市計画などに務めた功績は非常に大きい。また、構造計算の必要上から、尺貫法・ポンドヤード法の不合理性を痛感し、建設業界では尺貫法が広く使われていたため保守系勢力からは強い反発があったものの「メートル法」の普及に尽力した。自身の留学経験などから「ローマ字」推進論者で、戦後、国語審議会委員として、混乱していたローマ字表記の基準作成に尽力した。

佐野氏の郷土に向けた慈愛は常人の及ばぬものがあり、数々の足跡が残されている。大正11年、荒砥小学校に奉安庫の建設が計画された際には、無償で設計を請け、監督者まで派遣した。昭和12年、荒砥小学校の校旗を作成する際にも、多額の寄付を申出て荒砥小学校初の校旗が完成した。郷土愛の証である。

1956年（昭和31年）12月5日、鎌倉の自宅において死去。叙勲二等瑞宝章授与。